

銅賞

人権は一人一人の意識から

横須賀学院中学校三年

齋藤陽土

僕には生まれてから変わらないことがある。毎年三月に心臓の検診の為に大きな病院へ行くことだ。異常があったことは一度もないが念のためと通っている。

中学生になる直前の三月。午後からだったのに早くついてしまったために桜がきれいな病院の周りをお花見気分散歩していた。そんな時車いすで困っている方がいた。僕は面倒だし、誰かが手伝うだろうと思い見なかったことにした。だが気になってもう一度見に行ってみるとまだ困っているようだった。さすがにずっとこのままになっているのも「かわいそう」と思って「お手伝いできることはありませんか」と声をかけると「ありがとうございます。少し手伝っていただきたいです。すみません」と言われ頼まれたことは慣れない僕には簡単なことではなかったがなんとか力になることができたと思う。そのあとすこし話をした。中学校のことを教えてもらった。中学生になる不安のなかにあった僕はこれでどれだけ楽になったことだろうか。でも、僕がその人にできたことといえばたった一つ力

を貸したことだけ。それに最初は「面倒」と思い見なかったことにして感じたのは「かわいそう」という同情だった。

病院からの帰り道のことだ。バスにはノンステップバスと書かれていた。おばあさんやおじいさんにはそれでも負担がかかることだろう。でも手を貸す人は一人もいなかった。電車には車いすのスペースがある。でも電車は混雑していてこのスペースを車いすの方に譲る人は一人もいなかった。電車の座席でもそうだ。目の前におじいさんがつらそうに立っていると思っていたらとなりのおばあさんが座席を譲っていた。マンションまでの道の階段では手すりを使いながら妊婦さんがつらそうに荷物を持って歩いていた。

病院からの帰り道だけでもこんなに自分が手伝えたのに何もできなかったことがあった。なぜ僕はお手伝いすることができなかったのだろうか。正直に言って面倒だった。手伝わなければならないことはわかっている。本来若い僕たちが積極的にお手伝いを行うべきなのだろう。そして病院で出会った車いすの方を僕は「かわいそう」だと思った。同じ人間なのに本当にかわいそうなのか。見下したような言い方をしてはいないか。

人は生まれながらに自由であり平等。命や人格は決して侵されて

はならない。それを人権という権利で守られている。それが当然のことだと僕は思ってしまった。でも、僕は病院に行った一日で気づいているだけで何人かの方の人権を侵害してしまったのではないだろうか。見ただけで面倒と思い、同じ人間なのにかわいそうと見下しているようなことをしてしまった。手を貸すかは自由だが人を邪魔者のような扱い、見下すことは許されないことだと思う。僕は自分の過ちを見つめ二度と同じことを繰り返してはならない。そして次からは自分の力を使い人を助けられるようになりたい。こういうものは意外と意識から変わってくるものだと思う。ただ、僕が反省をして意識が変わっただけですべての人が変わるかというところではない。広めなければならぬ。バスはノンステップバス、電車には車いすスペースや優先席、階段には手すりなど体の不自由な方やお年寄りの方、妊婦の方が生活しやすい社会になってきている。そしてこれからも進化していくことだろう。だが、これでは不十分だと思う。結局は人を助けられるのは人だと思うからだ。どんなに段差が減っても、優先されるスペースができてても手すりができてても、負担が減るだけで段差を上るのも歩くのがつらいことも変わらない。優先スペースができてても譲ってくれる人がいなければ意味がない。

昔の人は人に手を貸したりすることが当たり前だったのかと思うことがある。そう考えると進化ばかりではなく、進化の末に後戻りすることもあるのだとおもう。そして今がこの時なのだと思う。どんなに環境が良くなって暮らしやすい社会になっただとしても人の心や意識が変わっていかねば意味がない。病院で出会った方は「ありがとう。すいません」と言った。でも「ありがとう」は僕が言うことだ。「すいません」と思うことはない。当然のことをやっただけだ。

これから高齢化がさらに進むことだろう。さらに意識が大切な時代になっていくだろう。この時に社会を担っているのは僕たちだ。今から意識を変えていくことで近い将来はさらに良いものになるだろう。この作文がきっかけになればうれしい。全ての人々が幸せで差別なき優しさのあふれる世界を築き上げたい。それが未来の担う僕らの夢であり、責任だ。

初めてお手伝いをしたときにうれしい一言をいただいた。

「ありがとう。助かります」